The Osaka University Library Bulletin ISSN 0387−4400

大阪大学図書館報

Vol. 21, No. 4, Dec., 1987(昭62) 通巻90号

目　次

○学内学術情報システム→高度研究・教育環境
○吹田分館新館披露式典開催さる
○吹田分館新館について
○昭和62年度大学図書館職員長期研修に参加して
○目録システム講習会(地域講習会)の実施について（報告）
○教官著作寄贈図書
○会　議
○日　程
○人　事

学内学術情報システム→高度研究・教育環境

中　西　義　郎

コンピュータおよびその周辺技術、ネットワーク技術の急速な発達に伴なって、学術情報システムの動きが活発になってきている。国立大学共同利用機関である学術情報センターは、情報検索サービス（NACSIS−IR）を開始したし、また、学会の協力を得て研究発表データベースの構築を進めようとしている。日本科学技術情報センターは、国際科学技術情報ネットワークを完成させ、ごく最近、試験運用を開始している。

ところで、本学での動きはどうであろうか。学内学術情報システムの構築を意図して、1982年に、当時の附属図書館長・山田信夫先生を座長とする大阪大学学術情報問題懇談会が設置され、委員の方々のご苦労で、現状における問題の大要と改善整備の指標がまとめられ、懇談会報告として部局長会議で報告されている。その内容は、大阪大学図書館報特別号(January 1983) に所載されているが、いま一度ここでその一部を再掲させていただく。

1．学内学術情報システム化の基本的な考え方

(1) 学内学術情報システムは、研究者のニーズに基づき形成され、研究者に対する研究支援サービスを行うため、運用される。

(2) 学術情報資源は、すべての研究者の共有資源であり、常にその最も効率的な利用を図る。

(3) 学術情報の流通・提供は、できるだけ一元化し組織的に行う。

(4) データベースの作成・導入等により、学内において生産される研究情報及びその他の

学術情報の一層の組織化を図る。

(5) 学内学術情報システムには、その運用の業務に関連した調査・研究開発の機能を備えさせる。

2．改善整備項目

上記の考え方に基づき、学内学術情報システムを形成し、研究者に対する研究支援、情報サービスの改善を図るためには、以下の項目について改善・整備を行うことが必要である。

〈新しい学内学術情報システムの形成〉

(1) 計算センターの学術情報処理機能と図書館の情報図書館機能との一体的運用を図る。

(2) 本学独自のデータベース形成を促進する。

(3) 学術情報流通のための学内通信システムの整備・強化を図る。

〈新システム形成において主として研究者との連携を必要とする課題項目〉

(4) 利用統計データの提供等に基づいて学内における学術情報資料の重複購入の調整を図りかつ、学内外を通じた学術情報の相互利用を促進する。

(5) 研究図書館機能及び組織の集約化を図る。

(6) 研究者の情報需要の内容及び学内分布などの構造的な把握を行う。

(7) 学内の学術情報関係予算の仕組の改善を図る。

〈新システム形成において主として図書館の推進すべき課題項目〉

(8) 図書館業務にかかる調査・研究・開発のための組織の新設等、図書館組織及び施設の拡充整備を図る。

(9) サービス改善のための図書館業務の総合的な機械化を推進する。

(10) 全学の学術情報の実務に携わる職員の教育、訓練を強化し、これら職員の適正配置と交流を促進する。

この懇談会の提言は、時機をえた意義のあるものであるが、それに続くシステム構想から実現へのステップは、知る限りのところでは、特別な進展を見なかったように思える。ここにきて、大阪大学デジタル統合情報ネットワークの実現が、関係の先生方のご努力で期待できる情勢にあるようで、その実現を機に、将来をみとおした学内学術情報システムの構築の動きが必要であると感じている。

ところで、情報ネットワークシステムの最近の動向をみてみると、ワークステーションを中心としたシステム展開がポイントになってきている。ワークステーションは、高性能個人用コンピュータと考えればよいが、パーソナルコンピュータと異なるところは、その高性能によって（その性能に上限を設定する必要はなく、スーパーコンピュータレベルの性能を持つワークステーションが、実現されるのもさほど遠くないともいわれている。）優れたユーザインタフェース、ネットワークインタフェースなどを実現しうるところにある。ワークステーションの源流は、Xerox PARCで開発されたAltoマシンにあり、ワークステーションに関する技術は米国が先進したが、日本も急速にその差を縮めてきており、経済性の点でも著しい発達を見せてきている。

ワークステーションは、情報システム利用の窓口になるわけであるが、水平連携（部内ワークステーション間連携）、垂直連携（ホストとワークステーションの連携）、対外連携（部外ネットワークと、ワークステーションの連携）によって、高度な情報活用が実現可能である。これらの連携実現には、基盤システムとしてのネットワークと、ワークステーションでの処理を支援するデータベースを中核としたホストコンピュータの機能が重要になってく

る。

ワークステーションを中心としたシステム展開を学内システムにとり入れれば、研究室にワークステーションを設け、部局内で水平連携、大型計算センターと垂直連携させ、部局間連携、対外連携をとるとともに、部局内または学内で必要なもしくは存在することが望ましいと考えられるデータベースを用意するということになろう。

このようなシステムが実現されれば、研究室から、計算リソースを使え、必要な学術情報にアクセスすることができ、かつ必要なところとの情報連絡が可能と考えられる。加えて、現在ある構内電話網をデジタル化し、それとの整合をはかるならば、学内業務の効率化（OA化）も考えられよう。

こうしたシステムは、単に、学内学術情報システムというよりは、むしろ、研究、教育、業務環境の高度システム化といえよう。以上は、おおよそのシステムプロフィルを述べたに過ぎず、このような構想をさらに詳細化し、実現するには大きな労力が必要になるであろうが、近い将来、本学の学内をこのようなシステム化したいものである。

また、このようなシステムを考えるならば、附属図書館としてはどうあるべきかをその脈絡で再考しなければならないが、その代わり、図書館の果たすべき役割、持つべき機能が明確になるはずである。

（なかにし　よしろう　吹田分館長・工学部教授）

吹田分館新館披露式典開催さる

去る10月5日(月)正午から、新館において、吹田分館新館披露式典等が開催された。吹田分館は、昭和45年8月に、工学部の吹田地区への移転に伴ない新営されてから16年ぶりに増築され、約5,300㎡（旧館約2,900㎡　新館約2,400㎡）の規模の図書館に生まれ変わった。

従来の学習図書館、研究図書館機能をよりいっそう充実させた新しい工学系図書館として学術情報提供の要となることを期待されながら、この祝典の日を迎えるに至ったのである。

この日は、熊谷総長をはじめ、学内外の関係者、約100名の出席の中、浅野附属図書館事務部長の司会で始められた。中西分館長の挨拶のあと、熊谷総長、松田工学部長の祝辞をいただいた。次に、祝電披露後、和田施設部長の工事概要説明があり、次いで新館建設並びに設備等に協力いただいた業者に対し、矢守附属図書館長から感謝状が贈呈され式典が終わった。

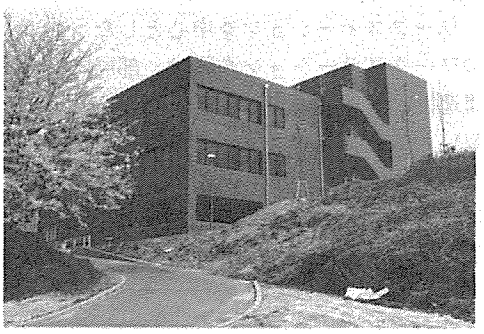
吹田分館新館について

― 案　内 ―

(1) 概　　要

教育・研究図書館機能の充実並びに、工学系図書館資料の集中化の推進のため、多くの期待を荷なって、昭和61年11月に吹田分館新館が竣工した。新館は鉄筋コンクリート3階建て面積延べ2,423.29㎡で、旧館の延べ2,957.82㎡にほぼ匹敵する広さがあり、吹田分館の総面積は、一挙に2倍の約5,400㎡となった。

この建物の外壁は、薄茶色のタイル貼りでシックな落ち着きのある仕上がりとなっている。



室内は、1～3階全階の床に絨緞を敷き詰め、窓を大きくとり、間仕切りによる小部屋をできるだけ少なくし、閲覧室、書架等を1フロアーに一体感をもたせるように配置することで、広くてゆったりとした雰囲気をつくっている。

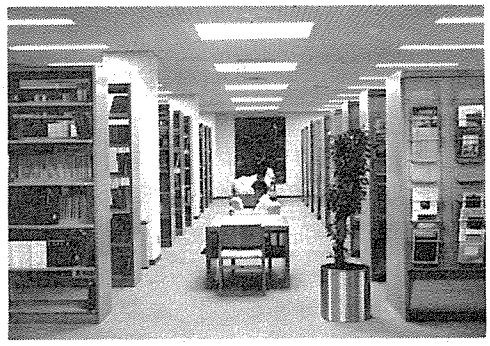
設備面では、全館の照明、空調が、1階の操作盤ですべてが行えるようになっており、また、身障者用に、エレベーター（積載 750kg、11人乗）が一基備え付けられている。

閲覧机等の図書館家具については、新しい図書館に相応した、重厚で気品のある木製品が多く、そのほとんどが特別注文仕様となっている。

以下は、1～3階建物内部の簡単な説明である。（平面図参照）新・旧館のつながりが、よくわかるように、全館の平面図と、各名称を、また、この増築に伴なって、一部図書の配置に変更が生じたので、その配置場所についても図面上に示しておく。

(2) 建物内部

— 1階部分 —



1階は淡いグリーンの絨緞が敷き詰めてあり、特別注文の雑誌架や木巻き書架、南側窓下の低書架、それに閲覧机が整然と並んでおり、アカデミックな雰囲気になっている。

この部屋には1970年以降の洋雑誌及び新着（カレント）洋雑誌、参考図書を配架している。

他に情報検索室、研究個席閲覧室があるので、次に紹介しておく。

1）情報検索室

研究調査活動に必要な文献数値等の情報提供サービスの充実を図るために、参考資料と近接した位置に情報検索コーナーを独立させた。

NACSIS. JOIS. DIALOG 等の文献情報検索システムとのオンライン接続用端末機を備え付け、ガラス張りパネルで囲んだ小部屋でエンドユーザーと対話による充分な調査のもとで検索効果が得られる雰囲気となっている。

2）研究個席閲覧室

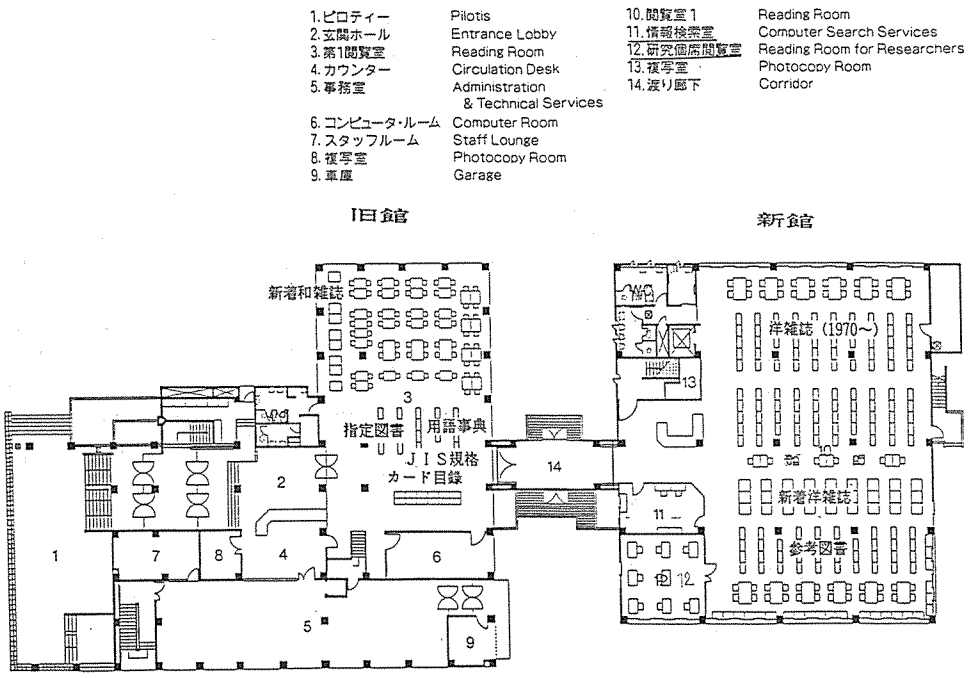
この部屋は一面に赤い絨緞を敷き詰めてあり、8席の閲覧机を設けている。

一見派手な感じに見えるが、実際にはなかなか落ち着いた書斎的雰囲気を感じさせる部屋である。新館は全体的にブラインドによる光線調整を行っているが、この部屋だけは、カーテンを取りつけ、趣を変えている。

閲覧机は衝立のある照明付で一般の閲覧机より少し大きめでどっしりとしており、椅子は薄紫色の布地を使用したハイバックとなっている。

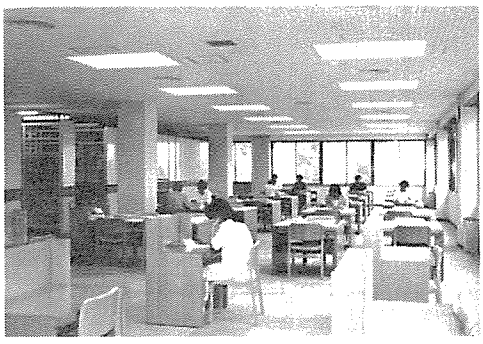
また、この部屋単独で冷暖房空調がコントロールできるようにもなっている。

1F 平面図



— 2階部分 —

この部屋の真ん中部分に電動集蜜書架が6連の幅で2列、698連分あり、和雑誌（新着和雑誌は除く）と1969年までの洋雑誌を配架している。



この書架はNFS型電動式スタックランナー（日本ファイリング社製）で、3階にも同じように配置されており、合わせると1,396連、最大収容能力約28万冊が見込める規模である。ボディーは薄いクリーム色で中央部の操作板部分に薄茶色のポイントをつけ、じみながら部屋全体になかなかマッチしている。

電動集密書架は、収容能力が大きいかわり開閉等の手間がかかり、利用者にとっては何かと使いにくい面もあるため最大12通路までとれるようにしてあるが、必要に応じ2通路分を1通路（約180cm幅）として利用できるようにもなっている。

閲覧席はこの部屋の南と北側に配しており、光のよく入る南側に広くとっている。

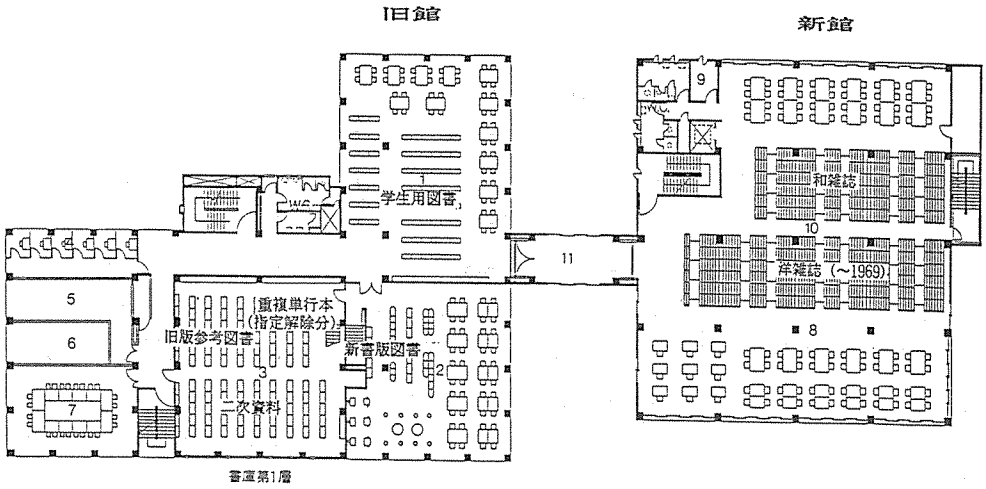
— 3階部分 —

この部屋の電動集蜜書架は2階と同じように配置されており、ここには工学部各学科から移動した単行本、及び学位論文、特許広報等を配架している。

南側の閲覧席は2階と同じであるが、北側に個人席室とグループ研究室がある。

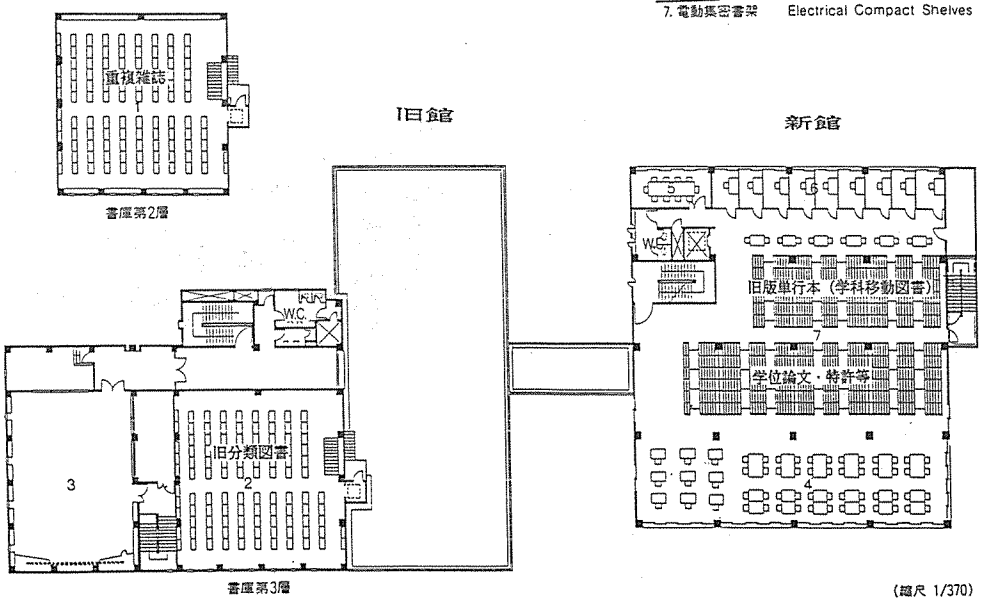
2F 平面図

1. 第2閲覧室 Reading Room
2. ブラウジングルーム Browsing Room
3. 書庫 Stacks
4. 特別閲覧室 Indivisual Studies
5. 倉庫 Storage
6. 分館長室 Director's Office
7. 会議室 Conference Room
8. 閲覧室 2 Reading Room
9. 倉庫 Storage
10. 電動集密書架 Electrical Compact Shelves
11. 渡り廊下 Corridor



3F 平面図

1. 書庫第2層 Stacks
2. 書庫第3層 Stacks
3. 視聴覚ホール AV Area
4. 閲覧室 3 Reading Room
5. グループ研究室 Groupe Studies
6. 個席室 Indivisual Studies
7. 電動集密書架 Electrical Compact Shelves



1）個席室

9つに独立したこの部屋は、3階北側の窓際にあり外の景色が一望できる、素敵な小部屋

といった感じである。旧館にも特別閲覧室として個室が6部屋あるが、新館の1部屋の面積は旧館の約2倍とゆったりとしたスペースが確保されている。

床にはベージュの絨緞が敷いてあり、粋な照明付閲覧机に豪華な肘付回転椅子、脇にはコンパクトな木製2段書架が備えつけてあり、各部屋それぞれ独自の空調コントロールが可能となっている。

2）グループ研究室

3階北側、西端に陣取ったこの部屋は、10名程度の研究会等に利用できるよう部屋の真ん中に楕円形のテーブルを置き、椅子は1階研究個席閲覧室と同じハイバックを使用している。スクリーンや、テレビ、ビデオ装置も備えつけてあり、空調コントロールも可能な、洒落た小部屋となっている。

昭和62年度大学図書館職員長期研修に参加して

山下　進

標記の研修が7月20日から8月7日までの3週間、会場を第1、3週目を図書館情報大学を中心として、間の第2週目を東京地区での見学を中心に行われた。この研修は毎年1回文部省、図書館情報大学の共催により行われるもので、参加対象を大学図書館等に勤務する中堅職員としたものである。また最近の大学における教育・研究活動の急激な進展に伴い大学図書館が利用者に対し学術情報を迅速、的確に供給する重要性が増大し、これに対応するため学術情報の最新の知識を伝え職員の資質と能力の向上を図ることを目的としたものである。

今年は第19回をむかえ参加者は各大学から44名となり、これは今までで一番多くの参加者となった。私立大学の参加者が多くおられたのも今年の特徴であった。3週間にわたる講義・見学の日程は大へん盛沢山なもので、どれをとってみても大へん貴重なものであったが、その中で私にとって特に印象的なものは“情報検索の理論と技法”の講義で情報検索のメディアの発達の図書館に与える影響について述べられたことである。今後メディアが発達するに伴い研究者が簡単な情報検索ならなにもわざわざ図書館まで足を運ばなくても個々の研究室からダイレクトに可能になってくる。そうなると図書館の専門性をどこでどう発揮していくのか、メディアの発達がこれから図書館にどうかかわりをもってくるのかというある意味で図書館の存続の意義を問う問題提起をされたことであった。また“資料の収集と選択”の講義で Patricia G. Schuman の講演記事 “Library Networks; a Means, Not an End” (Library J. Feb. 1, 1987, 33−37) を取り上げられ、図書館間ネットワークとオンライン目録についての米国の現状と問題点にふれ、ネットワークは図書館の将来について無条件にはバラ色ではないことを提示されたことである。我が国でのこれからのオンライン目録を押しすすめていく上で大へん考えさせられるものがあった。

貴重な講義と共に大きな収獲はやはり新しい人的ネットワークをつくることが出来たことであろう。講義の終った後の時間は、時にはいやほとんど毎日のように夜おそくまで仲間と語り合うことが出来、その中で他の大学の方が本当に自分達の職場である図書館をより良くしようと真剣に取り込んでおられるのに大へん感銘した。この長期研修に参加する前、以前長期研修を受けられた同窓生の皆さんがよく仲間で連絡をとり合っていたのをとても羨ま

しく思っていたが、実際に自分が参加してみて、やはり本当にいい雰囲気の研修であったことが実感出来た。

3週間の講義では大へん多くのことをおしえていただいたが、まだまだその時点では不消化なことがあり、この期間に学んだことをベースにして今後研鑽をつんでいきたいと考えている。最後に研修期間中文部省はじめ図書館情報大学の方々の心暖まるお世話をいただいたことに深く感謝いたします。

（やました　すすむ　整理課　和漢書目録掛長）

目録システム講習会（地域講習会）の実施について（報告）

伊藤　彰

去る9月、学術情報センター図書目録システムの地域講習会が附属図書館本館において開催された。学術情報センターでは、昭和60年度から目録・所在情報サービスを開始し、各接続館の共同分担目録作業による総合目録データベースの形成を行って来たが、このサービスをさらに推進し大学図書館の現場で働く目録業務担当者の教育訓練の機会の拡大を図るため、従来センターのみで実施していた講習会を地域においても開催することになったもので、今回初めて大阪大学と京都大学で行われた。

講習期間は5日間、受講者は共催大学とその近隣大学から選ばれた（大阪地区6名、京都地区10名）。講師はセンターの教官・職員（第1日）と、センターでの実務研修修了者（第2日以降。大阪大学3名、京都大学4名）が担当した。

日程とカリキュラムは下記のとおり（大阪地区の場合）。

第1日（9月3日）　目録システム概論　目録情報の基準（京都大学で合同）
第2日（9月21日）　第1日目のレヴュー　目録記述と入力仕様　目録システムの考え方　目録端末操作　検索（総論・技法・実習）
第3日（9月22日）　登録（総論・基本動作・実習）
第4日（9月24日）　登録実習　接続館側のシステムの運用
第5日（9月25日）　登録実習　まとめと質疑応答

講習は、センター作成の『目録システム講習会テキスト』を使用し、必要に応じ『目録システム利用マニュアル』（データベース編・検索編・登録編）を参照しながら、講義と端末実習（教育システムを使用）を織りまぜる形で行われた。

受講者の中には、すでにこの目録システムにより日常業務を行っている者も含まれていたが、大部分は初心者であった。そのため、目録端末の操作に慣れるのにかなりの時間を費した（ＡＬＡ文字の入力、各種ファンクションキーの機能やローカル・コマンドの使用法等、通常端末に較べ操作が複雑である）。

また、今回初めてということもあり、テキストの内容が必ずしも十分とは言えず理解しにくい点もあったし（記述の誤りや説明不足の他、画面遷移の例示が不適切、利用マニュアルへの参照がない等）。

しかし、小人数のためかなりきめ細かい指導が可能であった。わずか5日間の講習であったが、目録システムの概要を理解し、端末操作にも慣れて、目録登録の基本パターンを把握することができたのではないかと思う。受講者の感想もおおむね好評であった。今後は、初

心者向け講習会以外にも目録システム経験者を対象とした上級コースを行う等、受講者の経験に応じた講習会を行えばさらに効果があるであろう。

目録システムの円滑な運用のためには、システム自体の改善とともに、実務担当者がこのシステムを正しく理解し十分に使いこなせることが不可欠であり、今回のような地域講習会の意義は大きいと思う。

（いとう　あきら　医学情報課受入掛）

教官著作寄贈図書

昭和62年10月31日までに受入れした資料（順不同）

—本　館—

松岡　博（法・教授）
国際私法における法選択規則構造論
（有斐閣　昭62）

中野芳之（言文・助教授）
ドイツ人の日本像：ドイツの新聞に現われた日本の姿）
（三修社　昭62）

中野芳之（言文・助教授）
ケーラ作品集　第2巻
（松籟社　昭62）

—中之島分館—

川俣順一（微・名誉教授）
腎症候性出血熱
（医歯薬出版　昭62）

—吹田分館—

末石富太郎（工・教授）
水資源の保全：琵琶湖流域をめぐる諸問題
（人文書院　昭62）

大中逸雄（工・教授）
溶融加工学：機械系大学講義シリーズ24
（コロナ社　昭62）

山本雅彦（工・助手）
27th International Field Emission Symposium.　nati
（The University of Tokyo, 1980）

岸田敬三（工・教授）
材料の力学
（培風館　昭62）

横山　隆（工・助手）
流体解析への有限要素法の応用：サイエンスライブラリー情報電算機　37
（サイエンス社　昭62）

横山　隆（工・助手）
非線型連続体力学
（共立出版　昭50）

横山　隆（工・助手）
演習FORTRAN
（オーム社　昭50）

横山　隆（工・助手）
有限要素法とその応用：数学ライブラリー　38
（森北出版　昭50）

横山　隆（工・助手）
Thermodynamics
（Mcgrow-hill kogakusha Ltd, 1974）

—薬学部分館—

北川　勲（薬・教授）
海洋天然物化学：新しい生物活性物質を求めて
（化学同人　昭62）

会　議

―分館長会議

62．10．29(木)　14：30～

報告事項：1．主要行事について。事務部長から、各種会議、委員会等での活動報告があった。2．吹田分館新館披露について。去る10月5日(月)、正午から、同分館新館において、披露式典等が開催されたこと、および新館概要等の報告があった。3．本館玄関改修について。

協議事項：1．「大型コレクション」について。外国学術図書等の大型コレクションの購入・収書計画について、資料にもとづき、選定図書の選定経緯等の説明があり、協議の後原案を承認さた。2．その他。図書館体系検討小委員会の今後の活動方針について協議した。

―豊中地区運営委員会―

62．11．10(火)　13：00～

協議事項：1．「大型コレクション」について。この購入・収書計画について、選定図書等の資料が示され、選定経緯等について説明があり、委員から質疑応答協議の後、原案を承認した。2．本館新玄関の取り付けについて。当初の計画案から、資料のとおり、計画変更されたことについて協議した。

日　程

62．9．18	第8回大学図書館研究集会企画委員会	(大阪市立大学)
62．10．1	第61次国立七大学附属図書館協議会	(札幌第1ワシントンホテル)
62．10．2	第20回国立七大学附属図書館部課長会議	(　〃　〃　)
62．10．5	吹田分館新館開館披露式典	(吹田分館)
62．10．19	生命科学図書館ワーキンググループ会合（第19回）	(中之島分館)
62．10．22～23	第1回国立大学図書館協議会シンポジウム	(京都大学附属図書館)
62．10．27	中之島分館図書選定小委員会）昭和62年度第2回）	(中之島分館)
62．10．29	分館長会議	(本　館)
62．11．10	豊中地区運営委員会	(本　館)

人　事

異動前の所属・職名	氏　　名	異　動　内　容	発令年月日
		(採　用)	
	小山アンナ	医学情報課　受入掛　事務補佐員	62．9．1
	松本　眞樹	吹田分館　目録掛　事務補佐員	62．10．1
		(昇　任)	
整理課　課長補佐	橋本　健一	琉球大学附属図書館　整理課長	62．10．1

整理課　受入掛長	河崎　戎三	整理課　課長補佐	62．10．1
医学情報課　目録掛	宮内　　修	兵庫教育大学教務部図書課　整理係長	〃
		（転　任）	
兵庫教育大学教務部　図書課整理係長	石井　道悦	医学情報課　目録掛長	62．10．1
埼玉大学附属図書館	藤田　　弘	〃　　目録掛	〃
奈良女子大学附属図書館　受入掛長	喜多　吉一	整理課　受入掛長	62．10．20
		（退　職）	
医学情報課　受入掛　事務補佐員	岡本　裕子		62．8．31
医学情報課　目録掛長	岩本　　博		62．9．30
吹田分館　目録掛 事務補佐員	河井　道子		62．9．30

〰〰訂正とお詫び〰〰

前号（Vol.21 No. 2 & 3　通巻89号）に、誤りがありましたので次のとおり、訂正または削除してお詫びします。

1．13ページ、上から9行目　日程62．5．21～22：（日本歯科大学）を、（高輪プリンスホテル）に

2．　〃　上から15行目　日程62．5．22：分館長会議を、この一行、削除する。

3．　〃　日程62．7．8：第9回大学図書館（以下略）を第8回とする。

4．13～14ページ。下から10行目　人事は、大阪大学附属図書館長交替関係を次のように表からはずします。

大阪大学附属図書館長交替

任期満了　62．3．31　後藤　稠（医学部　教授）

就　　任　62．4．1　矢守一彦（文学部　教授）（65．3．31まで）

大阪大学附属図書館中之島分館長交替

任期満了　62．3．31　伊藤利根太郎（微生物病研究所　教授）

就　　任　62．4．1　鈴木不二男（歯学部　教授）（64．2．28まで）

吹田分館長交替

任期満了　62．3．31　山根壽己（工学部　教授）

就　　任　62．4．1　中西義郎（工学部　教授）（64．3．31まで）

5．15ページ　図書館の概況（1）

館外貸出冊数：蛋白質研究所図書室　34,919を3,041とする。

館外貸出冊数：薬学部分館　3,633を3,104とする。

情　報　検　索：本館　　38を87とする。
〃　　：合計　　1,674を1,723とする。

16ページ　図書館の概況（2）

中之島分館関係合計の雑誌受入種類数：「その他」15を22とする。

―― 以　上 ――

大阪大学図書館報　Vol. 21 No. 4　通巻90号　昭和62年12月10日発行
発行所　大阪大学附属図書館　〒560 豊中市待兼山町1の1　☎ 06 (844) 1151　内線2355